

月刊

アジアの友

MONTHLY The Asia-no Tomo

7・8

JULY · AUGUST

2009

日本で就職！ 郎媛琳さん
アジアで輝く☆ 鈴木典男さん



ABKの留学生が

荒川区の大太鼓盆踊り大会に参加！

去る9月5日（土）、あらかわ遊園運動場にて開催された「荒川区文化祭 大太鼓盆踊り大会」に、やまぶき寮をはじめアジア文化会館の各寮から20名近い留学生たちが参加しました。当日はまず荒川区国際交流協会主催の盆踊り練習に参加。踊りのコツをたっぷり教わり、夜の大会では見事な踊りを披露、地域住民の皆様と日本の夏を楽しみました。



◀ 踊りの先生の説明を熱心に聞く留学生たち



▶ 本番では思い切り盆踊りを楽しみました



月刊 アジアの友

2009年7・8月合併号 第477号

目次

- 2 **日本で就職！**
郎 媛琳さん
 (外資系証券会社勤務 東京大学薬学部卒業)
- 7 **アジアで輝く☆**
 「日本式ものづくりを伝えるために ～タイ」
鈴木典男さん (泰日工業大学 (TNI) 自動車工学部)
- 12 **インタビュー**
 「アジアNGOリーダー塾」誕生
 ～21世紀を担うNGO起業家を育成するために
伊藤道雄さん (ACC21 代表理事 立教大学大学院教授)
- 18 **ABK 日本語学校生リレーインタビュー**
 わたしたち・・・だから日本に留学しました ③
エドワード 杜 進明さん (マレーシア)
- 20 **連載紀行文**
 写真家・鎌澤久也のメコンのほとりで・・・(第14回)
「大理」
- 21 **News & Event**
- 22 **知友会通信** 奨学金・イベント情報
- 24 **MEMBERS** ご入会・ご寄付のご報告 (2009年5、6月)

<表紙作品>

ベトナム・尽きることないバイクの流れ

★表紙作者

藤井伸二

(Mr. Shinji FUJII)

ライター・写真家。90年代に取材・執筆した『地球の歩き方』シリーズ「タイ」と「バンコク」には過去に例を見ないほどの情報が詰め込まれ、それ以降のガイドブックに大きな影響を与えた。

著書に『タイ散歩 歩いて楽しむ異国の街並み』『金なし、コネなし、ベトナム暮らし』(ともにイカロス出版) 他

日本で就職！

郎媛琳さん



Ms. LANG Yuanlin

中国遼寧省瀋陽市出身。同市の東北育才学校で日本語を専攻し、卒業後の2004年10月来日。アジア学生文化協会日本語コースを経て2005年4月東京大学理系Ⅱ類入学。2009年3月同大学薬学部薬学科卒業。2009年4月より外資系証券会社に勤務。

日本留学で得たもの

——— 日本での留学生生活を振り返ってみていかがでしたか。

私は日本に来て5年くらい経ちましたが、すごく恵まれた環境で生活できていると思っています。留学生にとって一番苦勞するのは来日したばかりのころで、まだ言葉もできない、環境の変化も大きく戸惑うことも多いのですが、私は中学生のころから日本語を勉強

していましたし、初めての日本の住まいであるアジア文化会館では、みんなが優しくいろいろ助けてくれたので、困った、苦勞したという実感はありませんでした。

大学に入った当初は奨学金のことなどで悩むこともありましたが、本当にラッキーなことに、1年生の時から良い奨学金をいただけることになり、恵まれた留学生生活だったと思います。

——— 日本の大学の印象はどうでしたか。

私は日本以外の国の大学に行ったことがないので、日本の大学に入学して、大学とはこんなところ、と思っていたんですね。

ただ、あるときアメリカの大学に行った友人に話を聞いたら、アメリカの大学は日本より厳しくて、勉強に関してはみんな努力をしているみたいです。ですから私もアメリカの大学に行ったほうが、より必死に勉強できる環境に身を置けたのでは、と思ったこともあります。

一方、中国の大学に入った友人によると、向こうの大学も日本の大学と同じで、学生たちはあまり地道な努力はしていないようです(笑)。

ただ、中国のほとんどの大学生は卒業したら海外に留学したいと考えています。だから本業である自分の専門の勉強は必要最小限にして、英語に力を入れてTOEFLなどの試験で高得点をあげることを目標にしているんです。

そのほか日本と中国の大学生を比較してみると、中国の大学は高校の延長線のような感じで、勉強以外のこと、たとえばアルバイトやボランティア活動のような社会との接触はほとんどありません。

日本はアルバイトは当たり前ですし、ボランティア活動に参加する人も珍しくありません。学生が自分たちの組織を作ってビジネスをしたり社会貢献をしたりといったことも多いですね。私もそういったことに参加して社会に触れましたが、とても勉強になったと思います。

——— 具体的にはどのようなことでしょう。

たとえばアルバイトでは電話の応対など、

社会人としての常識を教えられるわけですが、今、社会人になってその時の経験が生きているということを実感します。アルバイトをするというのは、お金を稼げるだけではなく、社会に触れるという意味でもすごく重要な経験だと思います。

また、私は中国からの留学生をサポートするサークルに入っていましたが、そこでは留学生活や学校の留学生サポートについて留学生たちに様々な形でアドバイスを行いました。また簡単なビジネスのようなことにもチャレンジしましたが、こういったことは中国の大学に通っていたらできない、思いも寄らなかったことではないかと思います。

薬学部から金融の世界へ

——— 薬学部で学びましたが、就職は金融業界、文系ですね。

薬学部を選んだのは薬剤師になるためではなくて、研究者になりたかったからです。薬学部なら、好きな生物や化学の勉強をさらに応用発展させた勉強ができるのではと思ったんですね。当時は金融会社、証券会社の存在すら知らなかった(笑)。

ところが大学に入っているうちに、研究者という職業は自分には合っていないのではと思うようになりました。もっと広く社会を知りたい、そういう環境で働きたいという思いを持つようになったんです。

私が金融業界に関心を持ったのは大学2年生の時で、今の証券会社が主催する人材育成プログラムに応募したことがきっかけです。そのプログラムでは、まず国内選考で選ばれ

た日本国内の学生たちが交流をし、そこからさらに選ばれた人にはニューヨークに行って世界各地の大学から選ばれた学生たちと交流するチャンスが与えられるんです。私は国内止まりだったのですが、それで初めて今の会社の存在、金融業界のことを知りました。さらに同時期に金融の世界に行った先輩からも話を聞いて、こういう世界もあるんだ、面白そうだなと思ったんですね。

その後大学3年生の夏休み中にこの会社のインターンシップに参加して、1週間ほど職場を体験したのですが、全てが新鮮でした。株の動きも、こういうストーリーでこう動くのではないかという予想が実際にその通りになるのを見て、凄いなあと感心しました。そしてその時はっきりとこれは面白い仕事じゃないかと思ったんです。それで本採用のプログラムにも応募することを決めました。

研究、特に薬学の領域では、10年、20年をかけて一つの薬の開発を行います。そして何万、何十万人の命を救うのは本当に偉い仕事だと思うのですが、結果が出るまでは長い時間がかかります。一方で金融の世界というのはとても変動が激しく、毎日結果が出る世界です。私には社会全体の動きを見渡しながら、毎日結果を出すことが求められている環境がふさわしいと思ったんです。

——— 今はどのようなお仕事をされているのでしょうか。

外国株のセールスとセールストレーダーをやっています。アメリカ、ヨーロッパ、アジアの株など、日本株以外全てを見えています。セールスというのは、たとえばリサーチ部門

が作る見解を参考に自分の見解を作り、この株はいいかもしれないとお客さまに情報を提供するような仕事です。

会社では人のキャパシティがものすごく求められています。一人当たりの仕事量が多いので、それをどうやって効率良く優先順位をつけて回していけるか、というのが今の自分には難しいところですね。

——— 社会人になって2ヶ月少々ですが、学生時代と違うなと感じるのはどのようなところですか。

学生時代のように間違っても大丈夫という世界ではないですね。毎日が評価されているといっても過言ではないと思います。日々の積み重ねがあって、周りがそれを評価する。そこは難しいところで、学生時代は試験前がんばって勉強して良い点数をとればいいというスタイルでしたが、今は期末試験のような大きなイベントが無い代わりに、毎日がイベントで、毎日評価されています。そこが学生と社会人の大きな違いだと感じています。

——— 具体的にはどのような部分でしょう。

たとえば外に出すEメールはドラフトを作り、上司にチェックしてもらいます。その時、一回訂正してもらうのはいいのですが、二度と同じ間違いを冒すことは許されない。ところがそこは人間のダメなところで、同じ間違いを絶対に繰り返さないというのはありえない(笑)。

大学のレポートは体裁よりも内容重視でしたが、社会人になると電話の対応など、中身

はもちろん、そこに相手に対する思いやりやビジネス上の決まり文句などをきちんと盛り込まなければいけない。言いたいことが伝わればいいということでは無いんですね。

今の会社は外資系ですが、とても日本文化に根ざしており、日本企業のようにもあります。ですから日本語のビジネス文章にもすごく厳しくて、カタカナや英語ばかりを使っていると上司からOKをもらえません。企業はグローバル化しないとこれからの時代は存続できないと思いますが、金融のような人と接して仕事をするビジネスの場合、たとえ世界展開をしていても、その国の文化を熟知していないと仕事にならない。ですからたとえ留学生でも、日本のビジネススタイルを日本人と同じように理解し、実践しなければいけないということです。

組織で留学生が力を発揮すること

——— 会社が留学生に求めているものを感じることはありますか。

まず英語と母語が使えるということですね。あとは、日本人とは違うバックグラウンドを持っているということでしょうか。この会社はものすごく多様性を重視していてそれが相乗効果を生み出しています。私が外国株の仕事をしているのもたぶん留学生のバックグラウンドをもっているからではないかと思います。今はまだまだ欧米に比べるとアジア株に投資する額は少ないので、私が情報を提供す



る必要性はそれほど高くはないと思いますが、今アジア市場は急成長しているの、いずれ中国人としての自分が必要とされるときが来るのではと思っています。ただ、今はまだまだ勉強中で、まず言われたことを最善を尽くしてやるというのが一番大切なことだと思っています。

——— 社内で外国人を意識するのはどのような時でしょう。

これは興味の問題もあると思いますが、たとえば野球やサッカー、アメフトなどの話題で社員同士の会話が弾んでいても、私はその輪には入れません。大学生の時からそうなのですが、日本人と飲み会に行ってもなかなか話が盛り上がりません。日本語力の問題もあるでしょうし、私は人気漫画やタレントのこともあまり知らない、今の若者言葉などもよくわからないということもあるでしょう。ですから輪に入れないなあと思うことは以前からしょっちゅうありました。でもそれで苦痛を感じることはないんです(笑)。みんなと仲良

くなることは大切ですが、飲み会で仲良くなるより、私は私のルートで仲良くなればいいと思っていますから。

ただ、私も将来は営業の仕事をやりたいので、日本人が今どんなことに興味があるのかといったことなど、ある程度自分の引き出しを増やして、いろいろな方と話ができるようになりたいと思っています。

いつかは母国で

——— 将来はどんな目標を持っていますか。

将来は中国に戻って働きたいと思っています。具体的にこうなりたいというものは今は無いのですが、社会にインパクトのある人になりたい。それは経済分野でも、政治の方向でも構いません。

中国の成長スピードは、今とても速いのですが、そこにはいろいろな問題も生じています。そうした問題を改善するための力に、自分がなればよいなと思っています。

——— 外から母国を見て、見えてきたものもあると思います。

本当に留学できるというのはとても素晴らしいことで、母国の問題はもちろん、良いところもたくさん見えるわけですね。海外の経験のない人たちには見えてないことも私には見えているわけです。

私は 80 年代生まれなんですけど、この年代の人は教育を受けていて、中国の復興の力にならなければいけないという意識を強く持っています。だから、留学したから中国に対する

見方が変わったということではなく、以前から中国の力になりたいという考えは変わっていないんです。

就職のために必要なこと

——— 今振り返ってみて、留学生が日本で就職するためにしておくべきことはなんだと思いますか。

人にアドバイスできる立場ではないのですが（笑）、必要なのは先輩をはじめ、いろいろな人の話を聞くことだと思います。自分が信じていることが必ずしも正しいこととは限らないので、いろいろな人の話を聞いて視野を広げることが大切だと思います。本やネットもいいのですが、直接人から聞けば、ピンポイントで自分が聞きたいことがわかります。特別な場を設けなくても、楽しく食事をしながらでもできますから、チャンスがあればどんどん人の話を聞くことをお勧めします。

それから理系の人も政治や経済などのニュースに関心を持つこと。今世界はどう動いているのか、何が起きているのかといったことにまったく無関心に自分の研究だけに没頭するのは逆にマイナスなのではと思います。いろんなところに目を向けて、ヒントをもらったほうがいい研究ができるはずですよ。たまには経済新聞を読んだり、日経平均は今いくらになっているかといったことに関心に向ける。それは必ず自分の勉強、将来に役立つと思います。

——— とても貴重なお話、ありがとうございます。今後のご活躍を期待しています。

アジアで輝く

日本式ものづくりを伝えるために ～タイ

すずきのりお

鈴木典男さん

(泰日工業大学 (TNI) 自動車工学部)



鈴木さんと奥様の晶子さん

大手自動車メーカーから大学教師へ

大手自動車メーカー研究部門である(株)本田技術研究所で自動車のエンジン開発に携わっていた鈴木さんは、50歳を過ぎたら日本を離れ、タイで悠々自適に過ごしたいと考えていた。もっとも100%リタイアするにはまだ若い。ボランティア的な仕事・・・社会に役立ち、自身も満足感の得られる仕事に携われば・・・それが鈴木さんの夢だった。

そんな鈴木さんが、5年ほど前倒しで会社を

辞めることになったのは、新たにタイに開学するある大学の存在を知ったからだ。当時、社内でプロジェクトリーダー的存在だった鈴木さんは、トップダウンで降りてくる会社からの半ば無謀とも言える開発命令に対し、失望と行き詰まりを感じ、「このままでは自分の成長にはつながらない・・・」と強く思うようになっていた。そんな2006年の秋、偶然新聞で目にしたのがタイに翌年の6月に開学する泰日工業大学(TNI)に関する記事だった。元日本留学生たちが、日本式ものづくりをタ



イに伝えるために設立する大学・・・そのコンセプトに、自分の今までやってきたことが役立つのでは・・・、と思った鈴木さんは、すぐに大学にコンタクトをとる。

そして正月休みでタイを訪れた際に TNI の学長と面接をし、その1週間後には教員として正式に採用が決定。2月いっぱい会社を退職、栃木にあった持ち家も売却し、日本での全ての生活を整理して4月にはタイへの移住を決行した。まさにあれよあれよという間の出来事だった。

初めてのタイの組織

学内における鈴木さんの立場は教員である。これまで日本のトップメーカーでエンジンコントロールシステム全般を見てきた鈴木さんは、エンジンまわりに関してはかなりのレベルで教育を行う自信がある。しかし学生たちが専門的な技術を学ぶのは3年生になった今年からであり、取材時点では鈴木さんは教壇に立ち始めてからまだ1ヶ月少々が過ぎただけだった。

TNI では、日本商工会議所をはじめ多くの日系団体、日系企業からの協力を受け、機械ほか備品の提供を受けている。また、4年時前期には4ヶ月間、卒業研究の代わりに日系企業でインターンシップを行うことになっており、これが大学の売りにもなっている。

このため、これまでの2年間の鈴木さんの仕事は、経済団体や日系企業をまわり、支援や寄付、インターンシップ受け入れに関する協力をお願いして回るという、営業的なものも多かった。

技術を教えるつもりで来た鈴木さんにとって、違和感を禁じえないところだが、こうした業務は日本の大学教員でも行うことはあり、産みの苦しみと思えば乗り越えられないことはないだろう。それ以上に戸惑いを感じたのは、初めて足を踏み入れたタイ人経営組織に対してであった。

「日本人というだけで、お客さんの接待をはじめ、日本に関係する仕事の大部分がまわってきてしまうんです」

タイに駐在したことのある人、ローカル採用で働いたことのある日本人であれば、思わずうなずいてしまうところではないだろうか。

まして大学は開学したばかりということもあり、ほとんどのことが手探り状態。それをシステムチックに改善しようとする動きもあり感じられず、少なからずの驚きを感じたという。

もっとも、1期生である学生たちが3年生になった現在では、本来の姿である教員として、学生たちに接することも多くなった。そうした中、鈴木さんはこれまで日本で得た経験が役立つことを実感し、喜びや、やりがいを感じはじめている。

「“ワイクルー”という先生を尊敬する日があって、歌を歌ったり、誓いの言葉を述べたりするのですが、行事そのものも工夫が凝らされていて面白いんです（笑）」

TNI の学生は地方出身の者も多いためか、素朴で素直な学生が多い。制服の着用が義務づけられていることもあり、子供のいない鈴木

さんには、彼らの姿かがとても初々しく、新鮮に写ったという。このため学校の行事である新入生歓迎会など、1年目はほとんどの行事に参加していたようだ。

夢ばかりでは語れないタイ生活

鈴木さんは現在、3年前にご結婚された奥様の晶子（あきこ）さんとバンコクに2人暮らしだ。

結婚当初はタイで暮らすことなど夢にも思っていなかった晶子さん。結婚、ご主人の退職、渡タイという全てが一気に押し寄せてきたために一時期精神的に不安定にもなり、バンコクでの2人の生活にも、慣れるまで時間がかかったという。

「少し大変でしたけど、全てまとめて解決することが出来たので、今は逆に良かったのかなと思っています（笑）」

今ではタイ語も中級会話までマスターし、そろそろバンコクで仕事をしてみようという余裕も生まれてきているようだ。

鈴木さんご夫妻が東南アジア、特にタイを魅力的に感じるのは、先進国が持つがんじがらめの規制から抜け出せる緩やかでおおらかな空気が流れているからだ。日本の息苦しさ

から脱出したい、まさにその夢が実現したわけだが、実際に生活をはじめてみると、どうしても日本の常識を捨てきれない自分とも出会う。

「住居の電気や水

のことでトラブルがあ

り、修理の約束をしてもしょっちゅうすっぱかされる。天井がはげているという、工員が来て塗料をかけるのですが、周りに飛び散るを考えずにやるので、とんでもないことになってしまう（笑）」

入居前にやってもらえるはずだったカーテンのクリーニングが行われておらず、文句を言ったら家中のカーテンを全て持っていかれ、2週間カーテンなしで過ごしたこともあったという。

今でこそ、日常タイ語会話には困らなくなり、自分たちの意思を伝えられるようになったというお2人だが、当初はタイの常識に言葉の壁が重なり、笑っては過ごせない日も多かったと振り返る。

またそれは生活面だけではなく、職場でも当たり前のように起こっている問題だと鈴木さんは語る。タイ人教師とのコミュニケーション不足により、プロジェクトの作り方や、スケジュールの立てかたなどを改善したい、教えたいと思っても、うまく伝えられない。英語も相手は十分に理解できない。逆にタイ人の教員も鈴木さんに言いたいことを話さないため、その溝が日々大きくなっていく。それ



泰日工業大学（TNI）



教室で学生への指導を行う鈴木さん

は時間が解決してくれるのかもしれないが、今はまだ大きな歯がゆさを感じなければならぬ毎日が続いている。

それでも特別なバンコクライフ

当初はどのくらいお金がかかるのかわからなかったバンコクライフ。このため、大学からの給与でどんな生活ができるのか、好きなお酒も極力我慢し、日本料理屋などにも行かず、ずいぶんと節約をしたという鈴木さん。現在は生活に慣れたことはもちろん、マンションを購入して家賃がかからなくなったこともあり、ホテルで大好きなワインを楽しんだり、大物外国人タレントのライブに出かけたりと、国際都市バンコクでの生活を満喫しているという。

「日本だと高級ホテルにふらっと歩いて行って、ジュッフェを食べたりバーでくつろいだりなんて、簡単にはできませんよね。ここではそれが日常なんです」

鈴木さんは大学の教員ということもあり、

時間的な縛りがあまりない。日本で朝9時から夜10時まで働いていた頃と比べると、仕事とプライベートを両立できる今の生活スタイルには満足しているという。

「唯一物足りないのは、日本よりも休日が少ない、大型連休がないことでしょうか。その代わり3ヶ月の夏休み期間中は、多めに休ませてもらっています（笑）」

有給もなかなかとれないタイ好きの日本人サラリーマン

にはなんとも羨ましい話である。

何を教えていきたいか

日本式ものづくり教育を謳っているTNIではあるが、日本人でも「モノづくりとは何か」を本当に理解して仕事をしているエンジニアは少ないのではと鈴木さんは言う。

「あまりに漠然としすぎていますよね。日本的な車の作り方というのは“すり合わせ技術”と言われていますが、それが何かをわかっている人はほとんどいません。だから大学のコンセプトが先走りして、たしかに日本人受けはいい。ですが、自分としては今までエンジニアとしてやってきたこと、今、タイ人が掲げているプロジェクトをきちんと推進していくことを指導をしたり、あるいは課題テーマを与えて、それを解決するようなプロジェクトをつくっていきたくと思っています」

前述した通り、現在3年生である一期生たちは、4年生になると全員が企業でインターンシップを行う。実際の企業の現場でモノづ

くりを体験させて、日本語が判るエンジニアの卵として鍛え上げるわけである。

しかし下の学年になればなるほど、生徒数は増えるため、今後は全員を企業で受け入れてもらうことが困難になる可能性もある。

そこで今後は、インターンシップに行けない学生に対して、日本的なプロジェクトへの取り組みを教えられたらというのが、鈴木さんの一つのアイデアだ。

「タイの教育はまだ座学が多いんです。ワークショップで機械を使うなど、モノづくりの一環のようなことはやっているのですが、まだまだ研究テーマをもって取り組んでいるタイ人の先生はあまりいないようです。そこで日系企業と組んで、何か研究テーマを推進していきたいと思っています」

特に学生たちには課題への取り組み方や、データの計測、解析、活用法に関する教育をしたいという鈴木さん。そのためにはご自身のように現場のリアルな技術や、経験を伝えられる先生をもっと揃えなければいけないと感じている。

TNI は他の大学とは違う！？

TNI は今年で開学3年目。今はまだ大学の形ができ上がっていく過程にある。しかしその中核をなすのは「日本式ものづくりを教える大学」であるということ。しかしこれまで大学がその最も重要な命題に真剣に取り組んできたのか、鈴木さんは疑問を感じることもある。

「だからこそ、この大切なコンセプト実現に向けて、1期生が3年生になった今年度から、職員が一丸となって全力投球をしていかなければならないと思っています」

3年生は来年の6月、4年生になると同時にインターンシップに行ってしまう。TNI が他の大学と違うという独自性を学生たちに伝えられる時間はもう1年弱しかない。残された期間でいかに学生たちを TNI カラーで染められるか。それは TNI が掲げた大きな目標を達成するための第一歩であり、その実現には鈴木さんたち日本人教員の経験を最大限役立てなければならないはずだ。

タイで意義あることをしながら悠々自適に・・・そんなライフを思い描いていた鈴木さん。その夢は、もう実現しているのかもしれないが、それは想像とは少し異なる方向に向かっているのかもしれない。

「今は、お爺さんになっても、タイの学生たちに教えていけたらいいなと思っています」

そう話す鈴木さんの目には優しさと決意が溢れていた。



オフィスにて

<取材：09/7>

「アジア NGO リーダー塾」 誕生

～ 21 世紀を担う NGO 起業家を育成するために

いとうみちお
伊藤道雄さん

(アジア・コミュニティ・センター 21 (ACC21) 代表理事 立教大学大学院教授)



09年10月10日に開講する「アジア NGO リーダー塾」は、国境を超えて活躍できる NGO 起業家を育てるために企画されたプロジェクトで、毎年8人、5年間で40人の NGO リーダーを育てることを目標としている。塾生に選ばれると、全3群（計11回）の講義と、1～2週間の現場体験が待っている。講義には各関係分野の最前線で活躍する一流の講師が招かれ、NGO とは何かといった基礎知識から、今アジアで何が求められているのかといった課題、そして新規事業立ち上げに至るノウハウまでを体系的かつ総合的に学ぶことが出来る。現場体験はアジア各国で活躍するローカルの NGO で行われることになっており、ここに一人飛び込むことにより、NGO リーダーのビジョンを学び、現場の活動を肌で体験し吸収することができるわけだ。

今 年が記念すべき第一回目の募集となるこの塾の発案者は、アジア・コミュニティ・センター 21 (ACC21) の代表理事を務める伊藤道雄さんだ。30年以上にわたって、アジア各国の NGO を支援してきた伊藤さんに、このプロジェクトの意味、その結果期待する将来の NGO 像についてうかがった。

——「アジア NGO リーダー塾」開設に至った経緯をお聞かせください。

このプロジェクトをつくることを思い立った動機の一つは、日本の若者たち、あるいは日本の non-profit（非営利）、non-government（非政府）の世界で、アジアの国々の非営利・非政府組織のリーダーたちと対等な立場で対話し付き合える人材を育てたいと思ったことです。

日本には、約500団体の NGO（非政府組織）が、国境を超え国際協力を行っています。その多くは支援対象となる国の特定地域で活動しています。これらの団体は、貧困の中にある子どもや女性、農民そして少数民族等に支援活動を行い、意義ある役割を果たしていますが、その活動範囲はその地域に限られ、地域そして国を超えて横を繋ぐネットに発展していない。

ACC21 が事務局となっている「公益信託アジア・コミュニティ・トラスト（ACT）」では、貧しい子どもの教育、農民支援、環境保全等の分野でがんばっている各国の現地 NGO を訪問して回り、事業計画書を受け付け、審査し、選ばれた団体に日本で集めたお金を助成し—私はこれを“社会投資”と呼んでいます—、そしてこれらの団体の活動を3～5年間支援してモニターするという活動を長きにわたって行ってきました。ACT は、その性格上、特定の地域や国ではなく、アジアを広くカバーしているわけで、ACT の活動を通して私たちは各国の NGO のリーダーたちと出会い、意見情報交換をするわけです。そうすると、共通の課題が見えてきて、またアジア全体の NGO の動きや社会が見えてきて、そこから国境を超えた NGO 間のネットワークそ

して協働の必要性が見えてくるのです。

ですから、我々の活動には、地域や国を超えたネットワーク的役割があります。ある国の経験を他の国に紹介して繋ぎ、協力関係を作っていく。例えば、現在進めています、ACT が支援したフィリピンでのマイクロファイナンスの成功事例をカンボジアの NGO に紹介し、フィリピンの指導者を派遣してその普及を図っています。こうした形で「南南協力」を推進できるのです。こうした活動が出来る日本の NGO は現在少なく、またネットワーク的資質そして能力を持った人材は日本では限られているのが現状です。

どちらかというと、日本の多くの NGO は職人的性格を持ち、現場に入り、現地の人たちと一緒に生活をし、汗をかき、経験を共有しながら、現地の人々の生活改善を図っていく。また、日本から特定の団体や個人に奨学金などを送り続けるというタイプのものが多いのです。これらの活動は、人間関係の観点からとても重要だと思います。ただ、私はもうひとつのタイプがあっても良いのではと考えるのです。すなわち、もっと戦略的アプローチをとっても。言い換えれば、アジア各国の現地 NGO が貧しい同胞を支援するためにがんばっているのを日本からは資金的に支援し、同じ価値観・目標を掲げている NGO を増やし、ネットワーク化し協働関係に発展させていく。このようにすれば、限られた資源を有効に活用し、大きな力になるのではと考えるのです。今や、普通の市民や人々は、国境を超えて考え、行動するときに来ていると思います。経験そして人々が培った“英知”を共有し、共に生きるコミュニティを、アジアにそして世界に作る時が来ているように思うのです。

したがって、こうしたミッションを果たせる人材を育てたいと考えたことが、塾を計画した一つの動機です。

二つ目の動機ですが、私がアジアに初めて入った 30 年前とは違い、今は多くの国で社会正義や社会的公正を標榜し活動する NGO が育ち、それぞれの国で大きな役割を果たすようになっています。これらの NGO は、バングラデシュなどでは政府の役人の研修を行ったり、大学を創設・運営したりするまで成長しています。フィリピンでは、政府との対話を積極的に進め、NGO リーダーの中には、政府の高官に任命されるような関係に発展しています。そのほか、タイやインドネシアなどでは、政府に対し提言活動を行い、貧困者の権利を擁護し、推進しています。このように、アジアの NGO は、国内でも国際舞台でも発言力を着実に高めています。翻って、日本の NGO の現状を見ると、その発展の歩みは私にとってはのろいように思えます。社会的関心は高まっているものの、NGO の実力は今だに限られ、社会的存在感は薄いものです。アジアの今後の姿を考えると、成長してきたアジアの NGO のリーダーたちと対等な立場で、21 世紀の社会を語り、行動を起こせる人材が必要と考えたのです。

この問題意識そして構想は、ずうっと以前から抱いていたのですが、今回、(財)MRA ハウスという団体がスポンサーしてくださるので、この「アジア NGO リーダー塾」が実現することになったのです。

—— プロジェクトの最終目標は非常に高い所にあるということですね。

いや、むしろ低い所にあるのでは（笑）。

政府や大企業が国際社会における主要なアクターになっていますが、普通の人々が非政府・非営利組織をつくり、国境を超えて社会の底辺で協力の輪を広げていく環境を作っているというのですから。

政府や大企業もそれぞれのミッションがありますが、国際社会の中では、非政府・非営利組織も相応の役割を果たしていく必要があります。政府には政府の強みと限界があります。国益というものに縛られ、その運営管理は法律・規則に従い、機動性や柔軟性に乏しいものです。残念ながら、途上国の政府は、国民が貧困が故に税金は乏しく、政府としての本来の役割を果たしていないケースが多いのです。そして企業、とくに多国籍企業の存在が大きいのですが、その大きな動機は、マーケットの拡大、利潤の極大化です。社会的ニーズに応じて利潤を得るというのは当然なことですが、行き過ぎると、マーケットへの支配力を強めるための競争が激化し、投資先である途上国労働者の人権を無視し、また環境破壊を引き起こすことが間々あります。世界におけるこうした政府そして企業という二大アクターは、その性格上、どうしても穴埋めできない部分が出てきます。その結果が、貧困者の存在で貧富の格差の拡大です。そして地球環境の悪化です。

貧困で苦しむ人々がアジアにはまだ 8 億人ほどいると言います。日本政府もアジアの開発途上の国々に頑張って援助活動を行っていますが、草の根レベルの人たちのパワーアップにはなかなか繋がりません。今なお、アジアの大都市では、物乞いをする子どもたちを見かけ、想像を絶するような貧しい居住環境で生活する人々がいて、農村部へ行けば、土地を持たない農民が大勢います。最近訪問し

たフィリピンのセブ島の漁民の月の稼ぎは3,000円～5,000円と言います。そしてマニラ市内では物乞いする6～7歳の少女たちに出会いました。同じ人間として、こういった状況は放っておけないと思います。今や、国境を超えて考えるときです。比較的経済的に恵まれている日本人にはこうした考えと行動を起こすことが必要だと考えています。



——— 最近は地元の貧しい人々を訓練して雇用し品質の高いものを作り、それを先進国で販売して資金を得たり、または貧しい女性たちにお金を貸し出して小事業を始めさせ、収入を得させた上で利息とともに返済させる、いわゆる社会的ビジネスが広がっているようですが、目指す起業家育成はこうした方向ではないということですか。

いえいえ、こうした人たちも「アジア NGO リーダー塾」の塾生候補になる人だと考えます。ただ社会的ビジネスと従来のビジネスとどこが違うのかということを少し説明しますと、近年関心を集める社会的ビジネスというのは、貧困問題や環境問題、その他社会問題を改善・解決するために立ち上げられるものですが、そこにビジネスの考えや手法を取り入れようというものです。おっしゃられたマイクロファイナンス（小規模金融）は、その一例です。すなわち、これまで NGO が寄付者や支援者を募って資金を集めて貧困者の自立支援を行ってきたのですが、マイクロファイナンス事業では、商売として少額を貧困者、とくに女性の貧困者に貸し出し、利息を付け

て返済させ、自立を促すという手法です。マイクロファイナンスが効果を出す場合と、失敗する場合があります。また、貧しい国の雇用創出を図るため、NGO が作った会社を通して貧しい人たちの生産品を輸入し販売するというフェアトレードも実施されています。恐らく、こうした社会的ビジネスは今後広がっていくと思います。これら社会的ビジネスは、NGO の経験そして発想から派生したものと考えていいでしょう。

しかし、社会的ビジネスは、社会制度を変革していこうとする運動としては限界があります。それはあくまでもビジネスですから。そこで新しい社会づくりを行っていくためには国益に惑わされない、企業益に惑わされない、自発的な人間としての活動のセクターが必要です。政府や企業に対し、直言をし、状況改善のための提言し行動していくことが必要なのです。また時には、共通の課題に向けて政府や企業と協働することも必要なのです。アジアの中で光が当たっていない人たちの声に耳を傾け、現地 NGO の人たちと共に声をあげていくことが求められているのです。

アジアそして世界の未来を展望するとき、いつの時代にか、国境や国籍の概念が薄らぎ、アジアにそして世界に連邦的な政治体制が生まれるかもしれません。そうした政治体制下では、裕福な地域の人たちには累進課税がかけられ、開発や福祉が遅れている地域の人たちにはその税金が回されるかもしれません。もちろんこうした考えは理想的すぎるかもしれません。実際、そうした社会が生まれるまでにはこれから 50 年、いやもっとかかるでしょう。しかし、そうした方向に向かって、現在、政府開発援助は、いろいろ課題はありますが、その変形としての役割を担っているとも言えます。また NGO は、市民からの資金を集めボランティア的に途上国で活動し、ささやかながら富の再配分を行っていると言えます。

本来なら、国連がそういった推進役・旗振り役をする機関なのでしょうが、各国の国益と政治がぶつかり合い、なかなかうまく進みません。世界には貧富の膨大な格差が残ったままです。NGO は、国益を超え、私益を超えて動きます。そういった意味で NGO は、世界の新しい歴史を作っていくアクターとして考えているのですが。

こうした考えも踏まえて、「アジア NGO リーダー塾」を企画したわけです。

——— 高邁な理想を掲げられ、人材育成を考えられているようですが、実際どのような応募者を想定されているのでしょうか。

夢を描く人。そして冒険心を持っている人。実行力のある人です。多少細かく言えば、構想力のある人、他者に開かれた姿勢を持つ人、コミュニケーション能力を持つ人—単に英語

を話せるというだけでなく、他の人の考えをよく聞き、自分の考えを効果的に相手に伝えることのできる人—、説得能力のある人ということでしょうか。年齢や国籍は問いません。これから NGO を企画し活動しようとする人、現在 NGO に所属していて、組織の活動のステップアップを考えている人の応募も期待しています。

詳細は、ACC21 のウェブサイトの「募集要項」にアクセスしてみてください。この「アジアの友」の読者からも応募があると嬉しいですね。

——— どうも有り難うございました。塾生が多く集まることを期待しています。

伊藤道雄（いとうみちお）

南山大学卒業後、カリフォルニア大学 (UCLA) 大学院行政学課程修了。1973 年日本国際交流センター勤務。1979 年より公益信託アジア・コミュニティ・トラスト (ACT) の活動を通じてアジアでの資金援助活動に従事。草の根レベルの協働体制をつくることを目的に 1987 年 NGO 活動推進センター (現 JANIC) を NGO 仲間と設立、事務局長、常務理事を歴任。2001 年よりアジア農村改革・農村開発 NGO 連合 (ANGOC) 副理事長。2003 年立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科教授、2005 年アジア・コミュニティ・センター 21 (ACC21) を設立、現在に至る。共著に『国際協力 NGO ～市民社会に支えられる NGO への構想』(日本評論社)、他。

「アジア NGO リーダー塾」 募集要項

【募集対象】 1) 新規 NGO・事業立ち上げを計画している者・志のある者

※社会人、学生を問わず

2) NGO 関係者 (活動のさらなる広がりをめざす者)

【応募期間】 2009年8月11日(火)～2009年9月24日(木) 午後6時

【募集人数】 5～7名

【受講料】 15,000円

【研修会場】 アジア文化会館(東京都文京区本駒込2-12-13)

※講義内容・講師の都合により場所が変更する場合があります。

【応募方法】 以下のものをご記入の上、下記応募締切まで E-mail でお送り下さい。

(1) 受講申込書

(2) 小論文(以下選択)

1. 「私の立ち上げたい国際協力 NGO と事業」(3000字以内)

2. 「私に関わる NGO のさらなる発展構想と実践計画」(3000字以内)

※締切:2009年9月24日 午後6時必着

・送信先:info@acc21.org

件名を「アジア NGO リーダー塾申込」とし、メール本文に住所・氏名・連絡先を明記してください。

・注意事項 (1) ファイル名は提出者の名前とファイルの内容がわかるものにして下さい。(例、「田中太郎 受講申込書」「田中太郎 小論文」など)、(2) メールで応募可能なファイル形式は Word/PDF となります。

【応募スケジュール】

・書類審査 2009年8月11日(火) 応募受付開始

2009年9月24日(木) 書類選考受付締切

・面接審査 2009年10月3日(土) 個人面接(20分)/グループ討論(60分)

・結果発表 2009年10月5日(水) 受講生決定

【問合せ先】 運営事務局:アジア・コミュニティ・センター 21 (ACC21)

☎ 03-3945-2615 / FAX 03-3945-2692 (担当: 阪口)

E-mail: info@acc21.org

詳細情報: <http://www.acc21.org/ANLI/top.html>



ABK 日本語学校生リレーインタビュー

わたしたち・・・だから日本に留学しました ③

エドワード 杜 進 明さん

EDWARD TOH CHIN MING

マレーシア ジョホール州出身

—— 日本に関心を持ったのはいつ頃ですか？

マレーシアではよく日本の観光番組やアニメなどが放送されていますし、まわりの家電製品なども日本製が多かったので、日本への親しみというのは子供の頃から持っていました。

—— 日本に留学しようと決めたのは？

小学生の時には、自分でも気付かないうちに日本文化に影響されていたのですが、日本に留学したいとはっきり思うようになったのは中学生の頃です。

両親は、僕をシンガポールに留学させる予定だったのですが、シンガポールとマレーシアは似たような文化の国です。僕は違う文化に接したいと思っていたので、高校を卒業する 1 年前には日本へ行くことを決めて、日本語の勉強も独学で始めました。そして卒業後 4 ヶ月間日本語学校に通ってから来日しました。

—— テレビで見ていた日本と現実の日本は違いましたか？

違ったのは生活のペースがとても速いということです。道を歩くスピードも速く、みんな急いで仕事をしたり、勉強したりしている印象です。マレーシア人の場合は、急いでも休日日本人が散歩をしているくらいのスピードかな(笑)。また、マレーシア人はほとんど残業はしませんが、僕の

友人の日本人サラリーマンはいつも 23 時位まで残業をするそうで、信じられないという気がします。

—— では、日本生活でストレスを感じることもあるのではないですか？

今は進学準備で忙しく、予備校にも通っているのですが、休みはほとんどありません。それはストレスになっていると思いますが、大学進学のために日本に来たのですから、仕方がないですね。

—— 予備校は、一般の日本人向けの学校に通っているのでしょうか？

そうです。テレビCMや電車の広告などを見て、今の予備校を知ったのですが、授業のスタイルなどが自分の勉強方法に合っていたので選びました。

—— 日本に来た最初から予備校には通うつもりだったのですか？

日本に来た時から行きたいと思っていたのですが、授業料が高かったのも、しばらくは保留状態という感じでした。でも、6 月の日本留学試験(EJU)で数学の点数が悪かったので、やはり予備校に通わないといけない、生活費を節約してでも行きたいと思ったんです。

—— 留学生で一般の予備校に通っている人はあまりいないのではないのでしょうか？

そうですね。その予備校に留学生が入学するの



は僕が初めてのケースで、最初に入學手続きに行った時は先生もびっくりしたようです。授業料も普通は分割払いで、それは親が手続きをするのですが、僕の場合はできませんから、最初はちょっと面倒でした。結局は全額一括払いをすることで解決したのですが、生活費が残らず大変になりました(笑)。そうでなくても日本は物価、特に食費が高いので、1週間カップラーメンしか食べないという時もあります。今は奨学金をもらっているのですが、それも全て予備校の学費で無くなってしまいます。

—— 苦労して通い始めた予備校の感想はどうか。

とても良かったです。それまで分からなかったことが分かるようになってきました。同じ数学の授業でも日本語学校の方はEJU向けの授業なので、難しい専門用語などを詳しく説明してくれます。逆に予備校の先生はあまり専門用語については説明しない代わりに、もっと応用的なことを詳しく教えてくれます。先生方も初めてのケースである僕の試験結果にはとても注目しているようです。

—— 日本人対象の授業で厳しいと感じることはないですか。

ないですね。これで良い大学に入れると思うと勉強をするのが面白いとも感じます。

—— 予備校に來ている日本人の生徒を見て、マレーシアの受験生と違いを感じますか？

まったく違いますね。みんな真面目で、ほとんどの人がケータイをかばんの中にしまって、黙々と自分の勉強をしているという感じです。マレーシアでは授業中でもグループになって話したり、時々ケータイでメールをしたり、お菓子を食べてたりしています。たまには先生と一緒に食べたりするんです(笑)。

—— ところで、まだ日本に來て半年少々ですが、日本人の印象はどうですか？

日本人はとても親切だと思います。初めて日本に來た日、成田空港から東京に向かう電車の中でお爺さんがバナナをくれたんです。僕らの人数を

数えて「間に合うかなあ」と言いながら。初めての日本ですからみんな興奮していたので目立ったのかもしれませんが(笑)。

それから日本人は礼儀正しく規則をきちんと守っています。道路を渡る時もみんな横断歩道を使います。マレーシアにも横断歩道はありますが、ほとんどの人は利用せず、そのまま何もなかったところを車を避けながら道路を渡るという感じです。

また、日本人は社会の中での上下関係をとても重視しているように感じます。年齢や役職が上の人に対しては敬語を使いますし、深くお辞儀もする。言いたいことも我慢しているように感じます。マレーシアでは立場に関係なくお互いが素直に言いたいことを言い合う印象があります。

—— ABK日本語学校を選んだ理由は？

インターネット上にABKを修了した先輩方の書き込みを見つけて、評判が良かったからです。実際に入学してみて感じたのは、先生方が学生のために一生懸命だということ。特に今の担任の国分先生は、今まで出会った先生の中で一番熱心な良い先生だと思います。学生の進路に対してとても強い責任感を持っているという気がします。

—— 大学ではどのような専門分野に進みたいと思っていますか。

バイオテクノロジーです。理由は人を助けられる仕事に就きたいと日頃から思っていたからです。障害があって歩けない、働けないという人たちを助けたいという思いが、子供の頃から強かったのです。

—— 希望の大学に合格して時間ができたら何をしたいですか？

東京は建物ばかりなので、日本の大自然を見たいと思っています。ですから、時間とお金に余裕が出来たら(笑)、北海道に行ってみたいなあと思っています。

—— 受験勉強、これからもがんばってください。「アジアの友」も応援しています。

<インタビュー 09/7>

写真家・鎌澤久也の

メコンのほとりで..

十四、大理

大理——。いまでこそ昆明（雲南省の省都）から飛行機が飛び、日本からでも1日で行けるようになったが、80年代は木漏れ日のなかを、バスに揺られ10時間かけて行くしかなく、ほとく大理の原点はいまでもそこにある。そうして何度も通いつめた大理は、洱海（淡水湖）のほとりに開けた街で、背後に湖と対峙するように、蒼山の峰々が連なる風光明媚なところだ。街外れにはこの街のシンボル「三塔寺」が優雅な姿で佇み、郊外に出ると日本の山村風景を思わせる光景を、いたるところで目にする。少数民族ペー族の住む地としても知られている。

フビライの率いるモンゴル軍に滅ぼされるまで約300年間、「大理王国」として栄えた大理は、城壁に囲まれた南門から北門までつづく通りの両側に、軒の低い民家が建ち並び、ホテルや銀行、郵便局などがその界隈に集中している。いわば大理の目抜き通りだ。観光客が増えるにしたがい、土産物屋やレストランも多くなり、通りでは藍染でつくった服やテーブルクロス、大理石製の花瓶、灰皿、置物などが売

られるようになった。ちなみに大理石はこの街で採掘されるのでその名がついたのである。

そんな大理も他の中国の街同様変化が激しく、久々に訪れてみると、南門



と北門のあいだに、文化大革命時代に破壊されたという、「五華楼」が復元されていた。また、いままで民家が連なっていたところが、区画整理され大きな道路ができていたり、ここを曲

がればいつも行く食堂だと見当つけても、ことごとく外れ、狭い城内なのに迷ってしまったこともある。とはいっても昔からの人たちも住んでいて、オープンカフェでコーヒーを飲み、日本食までの食事ができれば快適で居心地もよく、日本人をはじめ欧米人旅行者は、根が生えたように長逗留する傾向にある。

手工芸で盛んな周城が、大理の北25キロほどにある。きれいに敷き詰められた石畳の路地に、漆喰の壁と土台が石造りの家屋が軒を並べ、くすんだ街並みに民族衣装の赤が映える。夕方、ガジュマルの木の下で繰り広げられる「市」は女性たちで賑わい、子どもたちが周りで飛び跳ね、男たちは軒下に陣取り、1日の疲れを癒すかのようにパイプをくゆらせている。見ていだけで心が豊かになっていくようで、ペー族のフォークロアが息づいた村なのだった。

〈写真〉大理の南門と近年改築された城壁。80年代の素朴だが味わいのある街並みは姿を消してしまった。

かまざわきゅうや・・・(社)日本写真家協会(JPS)会員、駒澤女子大学非常勤講師

中国雲南省を中心にアジアを撮り続ける。近年はメコン川、長江など、川をテーマにそこに暮らす人々に焦点を当てている。「メコン街道」など写真展を多く開催。著書に『雲南最南部への旅』(めこん)、『メコン街道』(水曜社)等

News & Event

「ニランジョン・バネルジ個展」のご案内

インド出身の作家ニランジョン・バネルジは、2000年に茨城県つくば市のカスミつくばセンターで、スーパーカスミイメージポスター「SUN・WATER・WIND・EARTH」展を開催しました。また、2007年にはイギリスとカルカッタでも共同絵画展を開き、大変好評を得ました。

タゴール研究家で日印文化交流に貢献し、インド政府より国民至高者賞を受賞された我妻和男氏（筑波大学・麗澤大学名誉教授）の推薦を受け、バネルジは麗澤大学で日本語も学びました。また、シャントニケトン出身・1998年に「貧困の経済学」でノーベル経済学賞を受けたアマルティア・セン教授からも指導を受け、彼が開花させつつあるベンガル地方の伝統とタゴール文化を融合させた感性の豊かな作品群は高く評価されています。この度、The Artcomplex Center of Tokyoにおいて、東京で初となる大規模な個展を開くこととなりました。皆さまお誘い合わせの上、是非ニランジョン・バネルジの世界を楽しみにいらして下さい。



日程：9月15日（火）～9月27日（日） 11:00～20:00（最終日17:00）

レセプションパーティー 9月19日（土）17:00～20:00

会場：アートコンプレックスセンター < www.gallerycomplex.com >

（東京都新宿区大京町12-9 2F Tel/Fax 03-3341-3253 / 丸ノ内線「四谷三丁目」駅1番出口徒歩7分、JR総武線「信濃町」徒歩7分）

主催：ニランジョンプロジェクト実行委員会

協力：（財）神林留学生奨学会 / （財）アジア学生文化協会 / 麗澤大学

ニランジョン・バネルジ（Nilanjan Banerjee）

1974年 9月21日生まれ

1993年 Visva-Bharati（タゴール国際大学）英文科卒

2000年 麗澤大学 日本語研修過程修了

2002年 麗澤大学で研究員、非常勤講師としてベンガル語を教える

2007年 イギリス／ロンドン、インド／カルカッタでグループ展を開催

作品：ベンガル語の短詩、童話、論文など多数執筆出版

現在：タゴール記念館 副館長の公職を務めながら絵画や詩作活動が続ける



ニュース

改正入管法公布 あら ざいりゅうかんりせいど 新たな在留管理制度がスタート

2009年7月15日に改正入管法（出入国管理及び難民認定法）が公布され、主に次のような新たな在留管理制度が導入されることが決まりました。

- 外国人登録証を廃止し、新たに「在留カード」を交付。
- 在留期間の上限を3年から5年に延長。
- 1年以内に再入国する場合は再入国許可手続きが不要。
- 留学ビザの在留期間が最長4年3ヶ月に。（予定）

また、今回の改正で在留資格「留学」と「就学」の区別がなくなり、「留学」に一本化されます。これらの施行日は公布から1年～3年以内となっています。

【留就一本化に伴うQ&A】 入国管理局ホームページより

Q-1. 在留資格「留学」と「就学」が、「留学」に一本化されると聞きました。いつからその取扱いは始まりますか。

A. この取扱いは、改正入管法が公布された平成21年7月15日から1年以内の政令で定める日から施行されます。

Q-2. 「就学」の在留資格を有する学生は法律の施行後「留学」に変更する必要がありますか。

A. 活動内容に変更がなければ、現在「就学」の在留資格を有する学生の方が「留学」に変更する必要はありません。

出典 : http://www.immi-moj.go.jp/newimmiact/q_a_details4.html#q4-1

イベント情報

留学生のための就職ゼミナール

- 日時：①10月16日（金）18：30～21：00
 ②10月17日（土）13：00～17：00
 ③10月24日（土）13：00～16：30

場所：横浜国際学生会館 3Fホール

内容：

①＜基礎編＞入管法改正など留学生政策のポイントと留学生をとりまく状況、就職&内定状況、在留資格（ビザ）の変更などの就職活動の基礎知識、及び、内定者が語る極意。

- ・山片 健司（東京外国人雇用サービスセンター 総括職業指導官）
- ・チェー ダラブッド（JFE エンジニアリング内定、東京工業大学総合理系修士 カンボジア出身）
- ・ドッコ センカク（ブライツ コンサルティング内定、横浜国立大学教育修士 中国出身）

②＜実践編＞ スーツ着用で。エントリーシート、自己PRの書き方、集団面接、及び、履歴書の写真、リクルートウェアのアピールポイントを参加型でわかりやすく進行。

- ・早川 芳子（NPO 法人 留学生職業能力開発センター 理事長）

③企業が求める留学生、市内の優良企業情報と採用事例、留学生を採用した企業の話、及び社会人体験談。

- ・池谷嘉一（横浜企業経営支援財団 国際ビジネス支援部長）
- ・堀口和美（横浜市経済観光局雇用創出課 担当係長）
- ・キョウ ギョウサ（香港上海銀行勤務 慶応義塾大学 2009 年卒業 中国出身）
- ・サンカル・ラル サハ（日揮株式会社勤務、横浜国立大学 2000 年卒業 バングラデシュ出身）
- ・オウ エイヒョウ（キングソフト株式会社代表取締役 横浜国立大学 1996 年卒業 中国出身）

対象：留学生

定員：先着50名（原則として3回連続受講）

参加費：無料

申込み：9月24日（木）9：00から受付開始

専用電話／045-507-0318、またはFAX／045-507-2441

※氏名（ふりがな）、性別、国、大学・学部・学年、電話番号を記載

問合せ：横浜国際学生会館（横浜市鶴見区本町通4-171-23）

☎045-507-0121（担当：荒川、五十嵐）

火曜～金曜9：00～21：00 土・日・祝日9：00～17：00

JASSO 外国人留学生 就職準備セミナー

日本の採用制度、企業側のニーズ、就職活動手順など、日本で学ぶ外国人留学生の就職活動に必要な可欠な情報を得るための絶好の機会です。

- ・日時：10月3日（土）10：00～17：00（入退場自由）
- ・場所：東京都立産業貿易センター 浜松町館 5階展示ホール（東京都港区海岸1-7-8）※入場無料
- ・内容
 1. 就活オリエンテーション・・・就職活動のための情報をまとめたDVD上映の後、担当者による講演を行います。
 2. 業界別セミナー・・・各業界を代表する企業の採用担当者にご講演頂きます。（事前予約制）
※参加企業は、三菱樹脂、日立情報システムズ、ファミリーマート等。
 3. 就活体験談コーナー・・・日本企業に就職し、現在活躍中の先輩たちから、就活の体験談、アドバイスなどを伺います。
- ・問合せ：外国人留学生就活準備セミナー運営事務局 TEL: 048-485-2384
- ・詳細情報：<http://www.jasso.go.jp/job/index.html>

MEMBERS

〈ご入会とご寄付の報告〉

2009年5月

賛助会員

服部 泰子 豊田市
(株)エレクトロデザイン 中央区

正会員

(1口)
秦 幸吉 大田区
木村 博・劉 彩品 川越市
高橋 作太郎 静岡市
樋川 好美 文京区
国松 昭 船橋市
張 延 取手市
志賀 道夫 文京区
堀 幸夫 杉並区
千野 克子 墨田区
山口 誠 吾妻郡
岩尾 明 日田市

新宿日本語学校
馬杉 栄一
関川 弘司・郁子

ご寄付

小木 曾 友（定額給付金） 入間市
籾下 勝 千葉市
栗原 静子 気仙沼市
河合 秀高 横浜市
小木 曾 建 世田谷区
西垣 宰朋 足立区
山口 憲明 日野市
馬杉 栄一 札幌市
服部 泰子 豊田市

2009年6月

賛助会員

香取 純一 千代田区

正会員

(1口)

新宿区
札幌市
千葉市
下坂 行雄 川口市
内山 敦之 中野区
田中 佐紀子 目黒区
(株)トランスボーダーズ 文京区
土屋 元子 千葉市
鈴木 智 日立市
竹嶋 俊紀 松戸市
宮前 つる代 秩父市
北星学園大学国際交流センター
札幌市
藤林 泰 さいたま市
赤星 裕 船橋市

ご寄付

DARYUSH COOPER USA
栗原 静子 気仙沼市
大島 光恵 練馬区
西本 梶 横浜市
竹嶋 俊紀 松戸市
永山 保 和光市
樽見 晃二 仙台市
平岡 昭子 目黒区
小木 曾 友 入間市

ご入会とご寄付のお願い

当協会は、政府の補助金を受けていない純民間運営の公益法人ですので、財源に限りがあり、皆様方からお送りいただく会費、寄付金は、本協会の活動を支える貴重な財源となっています。何卒ご理解、ご協力をお願い致します。

協会のあらまし

名 称：財団法人アジア学生文化協会

ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASCA)

所在地：東京都文京区本駒込2丁目12番地13号

代表者：理事長 小木曾 友

設 立：1957年（昭和32年）9月18日
故穂積五一氏創設

目 的：日本とアジア諸国の青年学生が共同生活を通じて、人間的和合と学術、文化および経済の交流をはかることにより、アジアの親善と世界の平和に貢献することを目的とする。

◇主な事業◇

- (1) 留学生宿舎の運営
- (2) 留学生日本語コースの運営（進学希望者向けの日本語を中心とする教育）
- (3) 留学生に対する情報提供支援
- (4) アジア語学セミナー、タイ語検定試験の開催
- (5) 帰国留学生のアジア文化会館同窓会、（社）日・タイ経済協力協会、ABK留学生友の会との連携・協力

◇会費（年額）◇

正会員 1口 1万円
賛助会員 1口 5万円
特別会員 1口 10万円

会員には広報誌「月刊アジアの友」が無料配布されます。また、広報誌購入だけを希望される方には、購読料年間3千円（学生2千円）でお送りしています。

本誌で広告してみませんか。

団体・企業を問わず、編集部へご相談ください。

日本留學生活に必要な最新のニュースを
毎月届けます！

ABK 留學生メールニュース



ビザ手続き関連情報 医療・保険情報
就職アルバイト情報 イベント情報
各種試験情報 奨学金情報
外国人相談情報 他

登録は WEB から

<http://www.jpss.jp>

月刊 アジアの友 2009年7・8月号

2009年8月10日発行（通刊第477号）

年間購読（送料共）3,000円（学生2,000円） 1部 300円（税込）

発行人 小木曾 友
編集 月刊アジアの友編集部
発行所 財団法人 アジア学生文化協会
東京都文京区本駒込2-12-13 (☎113-8642)
電話番号：03-3946-7565/4121 ファクシミリ：03-3946-7599
振替口座：00150-0-56754 E-mail: tomo@abk.or.jp
ホームページ：(<http://www.abk.or.jp/>)

published by ASIAN STUDENTS CULTURAL ASSOCIATION
(ASIA BUNKA KAIKAN)
2-12-13, Honkomagome, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-8642, JAPAN
☎+81-3-3946-7565/4121 ☎+81-3-3946-7599
Email: tomo@abk.or.jp
Home Page: <http://www.abk.or.jp/>

「月刊アジアの友」の購読会員（年3,000円・学生2,000）にご入会下さい。振替用紙又は電話等にて。

Nilanjan Banerjee Solo Exhibition from India

ニランジョン・バネルジ 個展



2009年9月15日(火)～9月27日(日) 11:00-20:00(最終日17:00まで)

レセプションパーティー: 9月19日(土) 17:00～20:00

The Artcomplex Center of Tokyo

アートコンプレックスセンター

東京都新宿区大京町12-9 2F

Tel/Fax: 03-3341-3253

<http://www.gallerycomplex.com/>

主催: ニランジョンプロジェクト実行委員会

協力: 財団法人 神林留学生奨学会 / 財団法人 アジア学生文化協会 / 麗澤大学